

未刊室町後期歌会資料―積文と略解題―(一)

武井和人
酒井茂幸

【緒言】

小論は、未刊のまま多く残されてゐる室町後期歌会資料を、広く学界に紹介することを意図としたものである。

今回の小論では、歴史民俗博物館高松宮本の中から、以下の未刊歌会資料三点を選び、積文を示し、併せて略解題も付した。各歌会の本格的な考証は、今後の課題としたい。

〔1〕内裏女中月次続歌（H一六〇〇―三四六）

〔2〕点取和歌（H一六〇〇―三三二）

〔3〕禁裏三席御会和歌（H一六〇〇―三一九）

なほ、略解題末尾に当該歌会資料の積文・略解題を執筆した者を（ ）に入れて示した。ただし内容は、武井・酒井両名で相互に検討した。積文作成にあたり、以下の方針に従った。

- (1) 漢字は常用漢字を除き、原本に近い字形を可能な限り採った。
- (2) 丁移りを、「一・一」の如く示した。

- (3) 底本の書誌は、各々の略解題を参照されたい。

小論は、

「校勘の方法に関する基礎的研究」

（平成二三〜二五年度・科学研究費補助金・挑戦的萌芽研究、研究代表者＝武井）

「中世後期歌会資料の総合的研究」

（平成二四年度・埼玉大学研究機構プロジェクト（研究費）＝一般研究②外部資金獲得促進研究、研究代表者＝武井）

による研究成果の一部を含む。

（武井和人）

【釈文】

1 内裏女中月次統歌

〔国立歴史民俗博物館蔵高松宮本（H一六〇〇一三四六）〕

〔内裏女中月次統歌文明〕（外題〔題簽〕）

内裏女中月次統歌

湊畔霞

のとかなるうらのみなとの夕しほに くもらぬかたもかすみそへつゝ

御製

柳露

さまくゝに秋見し草もそれなから 春のやなきそ露にみたるゝ

勝一

帰雁

いそきたつこゝろよいかにあまつかり 宮この花にしはしとまらて

邦高

春雨晴

ふるほともとにもたてぬはる雨は はるゝもわかすかすむそらかな

後 安禪寺宮

※作者名注記「後」、一旦「安」字右上に「前」と書き、二重線で抹消した上で、左上に「後」と書く。釈文では、修正意図を汲み、復元的に示してみた。

春月

山のはにかすみていつる月かけは みるもかひなき春のよの空

不道院宮 阿子丸

嶺花

よそにみるたかまの山のみねのくも かすみのひまに花やさくらん

後 岡殿

野径雉

朝またきゆきかふ人のたえまかと そともの野へにきゝすなくなり

道一

待郭公

まつ夜はゝなかしとやおもふほとゝきす ふけゆくまでに猶そつれなき

伏見院御母 南御方

夏草一

いかにしてわけはいらましかよひ路の うつもれはつる野への夏草

上らふ 二重院

夕納涼

しけみには秋やかよへる木のもとは すゝしくなりぬ夏の夕くれ

後 大すけ殿

七夕夜

七夕のたえぬちきりとおもはずは まれにあふ夜を猶やしたはん

後 新大すけ殿

簷下荻

よそにのみきくへきものをさひしくも のきはのおきに秋かせそふく

勾当 兵部卿侍

岡鹿

をかのへや身にしむかせも秋ふけて なをつまこふる鹿やなくらん

めゝすけ殿

尋虫声

たくれはそこはかとなきむしの音に わけまよひぬる秋のゝへかな

上らふ依願 ちやち

搦衣

しはしたにうちやたゆまぬからころも よさむをしつる身のわさにして

後 新大納言

水辺菊

たにふかみ下ゆく水にかけうつる きくのさかりを誰かくみゝる

新内侍 三重院

月契秋

秋きてそおなし雲井にすむつきも さやけさまさるかけはそひける

邦一 二

落葉

あかつきは露やをきそふ木の葉ちる まきのいた屋の音かはり行

池水鳥

さゝなみもとせぬまゝにをしとりの すみよかるらし庭の池水

安

林禁中雪

こゝのへやつかふるひとのあとしけき みきりの雪はつもりあへしな 本めすけ殿

忍恋

世にもれんほどをかきりと忍ぶ身の なをとにかくにうきこゝろかな 勝一

未逢恋

なからへてあふにかへんのためみさへ いまはつれなきわか命かな 道一

増涙恋

つゝめともそてよりあまるなみたにて まさるおもひの程はしらなん 南

会恋

さきの世にむすひしほともしたひもの とくるちきりにおもひこそしれ

別恋

したふ身はいそかぬものをわかれそと とりそしらすあか月の空 後大す

黙恋

なにとなをおもひよはらてうきひとの「三 いとふにつけてしたふこゝろそ 新大す

被恨恋

それとなくわか身を人のうらむるは かはらんとてのかことなるらし 勾たう

松嵐

なれゆけは軒はの山のまつにふく あらしのこゑもさひしからしを ちやち

旅思都

（貼紙）とをさかるみやこのそらをおもふにも 行すゑつらきたひの道かな 新大納言

祝言

なかはまのまさこのかすをかそへても きみかよはひはつきしと思ふ 上らふ

文明十六年三月廿八日社よく願う

余花

おなしくは春にをくれぬ木すゑそと おもはゝ花の色やそはまし

山葵

あふひくさちきりありてや神山に かはらすおふるたねしなるらし 安

待郭公

一こゑもいまはきかしなほどゝきす まつ夜むなしきしのゝめの空 勝一

曙郭公

ひとこゑもなかてはあらしほどゝきす「四 こゝろつくしのしのゝめのそら 岡との

時鳥幽

あけほのや雲のほかなるほどゝきす なくひとこゑは夢かうつゝか 邦一

袖菖蒲

えにしあるにほひをとめてあやめくさ ひきつるねをや袖にかけまし 旧院上らふ

故郷橘

ふるさとにうへしたち花にほひきて いまもかはらぬそてのうつり香 阿古丸

早苗

なかき日もくれぬるまでにさをとめか とるてあまたのきなへ草かな 新大す

夏月

夏の夜のすゝしき月にむかひてそ ねぬにあげぬるほともしらるれ 南御方

夏草露

をくつゆのみたるゝかたやなつくさの しけみをわけし野へのかよひち 権大すけとの

鶺鴒河

大井川いせきによとむなみのまに うふねのかゝりしらむ夜はかな 新大納言

水蛭

大井川ひまなくともすかゝり火の かけかと思しはほたるなりけり 上らふ

遠夕立「五

ふきをくる風そすゝしきあまくもの よそなる嶺の夕たちの空 ちやち

納涼

わきていますゝしかりけりやり水の なかれにむかふたくれのやと めゝす

六月祓

みそきするかものかはせに秋はゝや かよひやそむる風のすゝしき 大すけ

伝聞恋

まことそと人のことはをたのむより みぬおもかけの身にそはりつゝ

見増恋

わかおもひきゝしはことのかすならて みてこそいとゝこかれ侘ぬれ 勾当

逢恋

こひころもかさぬる夜半にゆくすゑも へたてはつなと契をくかな ちやち

暁帰恋

かへるさのこゝろやそらにまよふらむ 月にしらるゝあかつきのそら 勝一

誓恋

ひとすちにたのむとをしれかはらしの そのことの葉を神にまかせて 南

馴恋

くちぬへきそてのうらみようきこひを しほなれころもなるゝはかりに 旧上らふ「六

偽恋

もとかしと人もこそみれいつはりに こりぬたもとよ涙もらすな 上らふ

猥恋

かきりなく身をこそかこいていまはたゝ なれすはなにゝいとほれもせん 新大納言

歎名恋

いかにせんのちにまして猶おしき うき名をもらす人のつらさを 新内侍

絶久恋

あひ見しも今ははるけき世かたりを 夢にもなさて人やつたへん 権大す

薄雪煙

このころのしつかふせ屋はかやり火の けふりをたてぬたくれそなき 大す

浦舟

志賀のうらや日かけもけさはのとかにて 浪路まよはず出るふな人 安

山家

山さとはまつふくかせのをとをのみ うき世のほかの友とこそきけ 新大す

旅夢

(貼紙) くさまくらむすふかりねをなくさめて わかふるさとそ夢にみえぬる

砌下松

(貼紙) 君のみそみきりのまつのわかみとり」七 おひゆくすゑは花のさくまで 邦一

文明十六年四月卅日 龍王宮御成御題

首夏山

あさみとり木すゑをわくる山かせも わすれぬ花の春やこひしき 邦一

雲間郭公

あかすきくおなしくもまの一こゑに 月をわするゝほとゝきすかな 勝一

急早苗

くるゝまでとるてひまなくいそかめや このさとのみのさなへとおもはゝ 御せい

盧橘薫風

むめか香をさそひしかせよいつのまに はなたち花に又かよふらん おか殿

江菖蒲

けふそひくまのゝいり江のあやめくさ

阿古丸

五月雨久

今日いくかはれまもみえず五月雨の

安

夏河月

かけをさへしはしもとめすはや瀬川

道一

瀬鶴河

うきせとはおもひもしらてうかひふね」八のちの世そなをやみにまよはん

上らふ

峯照射

みねたかきともしの影を見てやいま

大す

深夜螢

ゆくほたるあやなきやみもとらぬや

旧上らふ

夕立早過

すゝしやとまちえしほとうれしさも

新大す

終日対泉

あすもこん岩井まのし水日くらしに

南の御方

暮林納涼

ゆふかせにみとりのすゑ葉打なひき

めゝすけ

寄風恋

さりともとのみしすゑを松かせの

ちやち

寄月恋

わかれちの月をかたみにちきらすは

勾たう

寄海恋

身をうみのみるめもからてくちやせん

権大す

寄原恋「九

かせさはくまくすかはらよわかなかの

新内侍

寄木恋

身をうらのあまのもしほ木かすゝに

勝一

寄草恋

かへにおふる草の名もうきわか方に

旧上らふ

寄鳥恋

へたてあるちきりはつらしやまどりの

をろかなるへきわかこゝろかは

寄虫恋

ねにたてすおもひわひつゝ夜なゝは

安

寄枕恋

わかおもひおつるなみたをいかにせむ

大す

寄簷恋

なにかのこるわか身をあまのとまひさし

邦一

窓中燈

(貼紙)まなひつゝ人やすむらんまとのうちに

上らふ

田家水

ゆたかなる水をこゝろにまかせつゝ

新大す」一〇

旅宿雨

たひ寝してきくもまちかき軒の雨に

権す

旅泊鳥

(貼紙)夜もすから友よひかはしなくちどり

ちやち

述懐多

(貼紙) ひとこともとけかたき身のあらましを なをかすくにおもふはかなさ 南

思往事

ひまもなくたもとにをけるしらつゆは むかしをおもふ涙なりけり 匂たう

社頭松

うらかせのふきをくりきてすみよしや 宮井のまつに浪そのこれる 道一

文明十七年四月九日 宮の御方御出題

連峯霞

ひとつにもふもとはみえて雪のこる 峯はあまたにかすみわけつゝ

夜梅

いかにめていかにみるへきゆめならて おとろくはかり梅かほる夜に 勝一

柳隔水

きしかけに枝さしおほふ青柳や したゆく水をへたてはつらん 邦一 一一

江春月

ふねよするいり江のあしまかすむ夜は さはるか月もかけおほろなる 阿古丸

浦帰雁

ほともなくうらよりおちになりぬらし 浪まにきゆる雁のかへるさ おか殿

静見花

春の日もわきてそなかきひとゝはぬ わかふるさとの花にくらして 上らふ

松上藤

はるはまたおなしみとりもさく藤の 色にそかへる庭の松かえ 南

郭公遍

もしも今きゝもらしぬるひとやあると なをなきつくすほとゝきすかな 大す

夏草滋

しけりあふ庭のまかきに咲ましる はなもいつれとわかぬ夏くさ こんす

暁納涼

ゆふまくれあつさもさらにわすられて こぬあきかせをそ袖にすゝしき 新大す

風告秋

きのふけふあきや来ぬらん風のおとの きゝしにかはる庭の萩はら ちやち

薄似袖

あきのゝにたちやとまらんはなすゝき 一二 さなからまねく袖とみゆれは めゝす

藜虫

ゆふつゆにひかりをそへてなつくさの しける野沢にとふほたるかな 新す

秋夕露

つくくゝとあきのゆふへのあはれさを おもへはそてに露そひまなき こうたう

滝月

すむ月のひかりをそへてきよたきや よなゝみかくなみのしら玉 新内

搦衣幽

夢さそふほとたにもなしさとゝをみ あらしのつにころもうつこゑ 安

籬菊

秋にさくきくをとちめか庭のおもに つきて花みし草のまかきは 邦一

橘落葉

しもこほるおち葉かうへにかせさえて わたるあとなきたにのかけはし

河千鳥

川なみのたちゐにつれてをちこちの こゑもさためぬさよちとりかな 安

雪埋竹

つもるらんかせおさまりて雪おれの　をとのみたかきまとのくれ竹　旧上らふ

言出恋「一三

ことの葉にいひひいてすともしらしかし　忍ふにたへぬおもひありとは　南

名立恋

ゆくすゑをたのむちきりのなかならば　たつ名もさのみなげかさらめや　上らふ

見増恋

しらせはやほのみしこすのおもかけを　かけてこゝろに恋性るとも　ちやち

互契恋

かはらしとちきればおなしこゝろにも　なをあさからぬほとやわくらむ　新大す

待空恋

たのめをきしそのことの葉をはかなくも　まつにむなくあくるよはかな　大す

難忘恋

わすられすしたふこゝろのたえぬ身を　あはれとたにも人はおもはし　新す

被猷恋

よそにうき身そしほれゆく恋ころも　なれぬをいとふたくひやはある　旧上らふ

山家路

山さとのこけちのあとをしるへにて　又すむひともたつねいるらし　権す

独述懐

うしとてもわかためならぬ世のなかを　身にことはりてなげかすもかな　こうたう「一四

祝言

うきなきいはほは御代のためしにて　君かよはひや松の十かへり　勝一

文明十七年五月廿一日 旧上らふとう

(二行空白)

夏草露

をきわたすゆふへのつゆのひかりをや　花はなつ野の草にからまし　勝一

五月雨久

三日月のありあけのそらになかまでも　ひかりそもらぬさみたれの雲

夏月

見るまゝにあぐるほとなきなつの夜の　そらうらめしき月のかけかな　おか殿

櫻

さみたれはとふ人もなしいたつらに　そどものあふち花やちりなん　邦一

暁水鶏

あまのとはあけかたなるをよひの　たえすくひなや猶たゝくらん　安

池蓮

すゝしくも露をきそふるゆふたちに　池のはちすの花そひらくる　阿古丸

蚊遣火「一五

さとことによな／＼いとふゆふけふり　むせふにこりすまよふかのこゑ　旧上らふ

照射

ますらおかともしのかけもしめるなり　あけゆく山の木との下露　南

鶉川

うかひふねよそにしられて夕やみの　川せをくたるかゝり火の影　大す

夕立早過

たかさとに又きほふらむなるかみの　をとをのこしてすくる夕立　権す

蛩知夜

なにことをおもひみたれてよる／＼は　もえてはたるの人にみゆらん　上らふ

納涼

よそにまてしられぬほとのおきかせも かよふ軒はの山のすゝしさ
夕蟬 新大す

しくれかときゝなすせみのもろこゑに ゆふへすゝしき杜の下風 ちやち

扇 ちやち

かせも今かよはぬなつのあつさをも わするあふきはうちもをかれす めゝす

夏祓 新す 一六

みそき川しるもしらぬもうちむれて あさの葉なかつ浪のまそなき 句たう

寄雲恋 新す 一六

いまはたゝよそなるみねのあまくもよ たえすこゝろになとかゝるらん 句たう

寄風恋 新内

いかなれはふきくるかせのたよりと身にしむはかりおもひそめけん

寄山恋 安

いつとなくおよはぬふしのやまにのみ おもひのけふりたゝ日はなし

寄野恋 勝 一

むさし野にあらぬ恋路のゆくす多も しられぬなかになをまよひつゝ

寄河恋 邦 一

いかにせむいのるとすれとみそき河 神さへうけぬなかのあふせを

寄下草恋 新大す

つゐにさてなひかさらめやつれなきのおなし色なる松のした草

寄塩木恋 権す

いつまでかからきおもひにくゆらまし うきにもこりぬあまのもしほ木

寄虫恋 上らふ

なればよも物はおもはしきりくす おなしまくらにねをは鳴とも

寄鳥恋 ちやち

わかれちにつきすもおつるなみたかな 一七 とりは八こゑのかきりあれとも

寄衣恋 新す

いつかさてほすまもあらむからころも うらみにたえすかゝる涙は

山家雨 なかはし

ひかすふる雨にはいとゝとふひとも なき山さとやさひしかるらん

橋上苔 南

山さとのまへのたなはしこけむしぬ うき世にかよふ道もなきまで

水郷舟 旧上らふ

うきしつむよそめよいかにうち川や なみのよるせにまよふ柴舟

朝旅 大す

(貼紙) わくる野のあしたの露のふかきにも いとゝしほるゝたひころもかな

砌下松

(貼紙) のきちかき松にこまつをうへそへて 千世もあまたの行す多そみん

文明十七年六月十九日上の御所さまより出たい

をみなへし

(貼紙) 女郎花ひとものいひさか野にも なひきやすきやならひなるらん

をみなへし 一八

(貼紙) 見てすきむものともなしやをみなへし 露にぬれつゝなひくすかたは

をみなへし 邦 一

なひくへきかたをさためよをみなへし こゝろおほかる野へにさくとも

をみなへし 安

(貼紙) へたてゝも色にそみゆるをみなへし うす霧まよふ野へのゆふくれ

勝 一

をみなへし

しほれゆく庭のまかきの女郎花 露おもけなる花のいろかな

阿古丸

ふちはかま

(貼紙) ふきをくるかせにつけつゝにほひさへ きつゝなれゆくふちはかまかな 旧上らふ

ふちはかま

(貼紙) ちくさにもましらさりせは藤はかま ひとりや野へにほころひなまし こんす

ふちはかま

(貼紙) はる／＼とにほひをとめてふちはかま すそ野のつゆにぬれつゝそ行 南一

ふちはかま

(貼紙) 風さそふにほひはさてもふちはかま たかぬきすてし物とかはしる 大す

ふちはかま

まかひなくちくさのなかのふちはかま さく野をとをみにほひきにけり 上らふ 一九

はしもみち

はつしくれそめつるかたもはしもみち なを秋あさき色やみすらん 新大す

※籠頭に貼紙なきも、第四句「き」文字左に貼紙あり。一旦籠頭より剝離せしもこの位置に残存したものならん歟。

はしもみち

しくれゆくおかへは秋の色ふかく わきてそめぬるはし紅葉かな ちやち

はしもみち

(貼紙) もすのゐるとを山もとのはしもみち ちりなん後の秋やさひしき 新すけ

はしもみち

みるまゝに色もわかれをゆふきりの たちえさひしきはしもみちかな めゝす

はしもみち

ちりやせむいまをさかりのはしもみち たちえをわたるもすのはかせに こうたう

おもかけに

(貼紙) おきわかれ又もちきらぬしのゝめの うきおもかけに残る月かな

勝一

おもかけに

ものおもふ身をもはなれすぬれは夢 さむれはうつゝおもかけにたつ

安

おもかけに

(貼紙) かひなしや身をもはなれすおも影に みゆるも人のこゝろならねは

おもかけに

(貼紙) けさもなをさすかに残るおもかけに 二〇 はかなき夢のわかれかなしも

おもかけに

(貼紙) にゐまくらかはすはよそのちきりにて うきおもかけにそひねをやせん 旧上らふ

うちもねす

うらみてもかひなきなかにうちもねす よな／＼物をおもふくるしさ

新内

うちもねす

(貼紙) ちきりしもいまそくやしきうちもねす まつにかひなくあくるしのゝめ 大す

うちもねす

ものおもふなみたのどこにうちもねす いく夜かさてままちあかさまし ちやち

うちもねす

(貼紙) ねをそなくよるはすからにうちもねす ゆめにもうときなかとおもへは 新す

うちもねす

すゑつゐに人やしらましようちもねす よるはすからにおもふ心を

権す

おもふこと

おきふしにおもふことなきよのなかの 人のこゝろも又やあらまし

上らふ

おもふこと

もどめてもおもふことなき君か代に たちかへるへき身をたのむかな

南

おもふこと「二二

ふくかせもおさまれる世のこのへに おもふことなくたれもすむらし

めゝす

おもふこと

(貼紙) このしなのうちののそみのほかはわか おもふことゝてなにかあるへき 句

おもふこと

(貼紙) とにかくに世はうきものそおもふこと かすまさり行なけきのみして

邦一

文明十七年七月廿一日に於て

雨中荻

あきかせのをとよりも猶さひしきは ゆふへのあめの軒のした荻

邦一

風前薄

ひとかたになひきしまゝの花すゝき つゆふきかへせ野への夕風

槿花

あたにのみなとさきそめてあさかほの ゆふかけまたぬならひもそうき

上らふ

松虫

いとゝなをさひしきあきの夜もすから たれうらみてかまつ虫のなく

阿古丸

鈴虫

あはれなり秋もよさむになるまゝに はやたえくのすゝむしのこゑ

大す

雲端雁「二二

うきくもはゆくゑさためぬあきかせに みたれやはする雁の一つら

勝一

鹿声近

山さとはそものを田になくしかの こゑをまくらにきかぬ夜もなし

南

待月

まちいてゝよそにやはやくなむらむ ふもとのさとはをそき月影

安

月出山

やまのはをいてゝも月のなかそらに すむへきかけそなをまたれける

新大す

浦月

名にめてゝなをやなかめむすむ月の かけもあかしのうらの夜すから

めゝす

月前鐘

かねのをとそすみのほりぬるありあけの 月はかたふく秋のよのそら

新す

有明月

ななき夜をまつにこゝろはつきはてゝ みるかけもなきあり明の月

ちやち

隣擣衣

夜さむまてきぬたのをとにひゝきて なをふしわひぬ竹の中かき

旧上らふ

秋田

秋かせのふかぬたえまもなひくらし をくつゆふかき小田のいな葉は

新内「二三

林紅葉

いろもなをふかきはやしにした紅葉 しくれよいかてこゝろしつらん

権す

初恋

のちはなをいくしほならむいろふかく おもひそめぬる袖のなみたは

めゝす

見恋

あま人とうき身やならんかりそめの みるめはかりにぬるゝたもとは

大す

稀恋

このまゝにわすれはつともまちやせん まれにとはるゝ中のならひは

句たう

怨恋

かすならぬうき身をしれはなか／＼に うらむとたにも人にしられし

寄日恋

安

文明十七年八月廿九日安王御持御出の題

朝霞

たのめつゝくれを待まの秋の日や わかこゝろから暮しわふらん

寄風恋

邦一

あさな／＼うすきかすみのたえまより」二五 袖にたまらぬ山かせそふく

見梅

夕くれのそらたのめのみなけ／＼とは ふきもつたへよ荻のうはかせ

寄煙恋

上らふ

夜もすから花もやまちし朝戸あけて むかへは袖にうつる梅かゝ

春月朧

しられしなあしのしのやのゆふけふり うき名にたにもたゝぬ思ひは

栽竹

南

月かけのくもりしよはもおほけれど かすむとみるそあはれそひぬる

帰雁稀

（貼紙）くれ竹のよゝにかはらぬためしとや」二四 君かみきりにうつしうふらん

巖苔

松たにもおふるいはほにむすこけの みとりの色や年をへぬらむ

勝一

もえいつる野への草葉もひとしほに 色こそまされ春雨のそら

春雨

田家水

山河のすゑせきいれてゆくみつの すみこそわふれ小田のかり庵

新大す

よし野やまさかぬ枝なくさくはなに 冬見し雪をおもひいてつゝ

花似雪

仙河筏

山川のはや瀬をくたすそまひとは いかたのさほのさす程やなき

ちやち

みやこにはちりはてぬれとおく山の 花をうかふる谷のした水

花浮水

旅宿

ひきむすぶくさのまくらにをく露や 宮こをこふるなみたなるらん

匂

とゝめえぬうらみはなをそつもりける ちり行はなの雪の木のもと

惜落花

思往時

よそちあまりよつの時をは夢にすきぬ いまゆくすゑようつゝともかな

遅日

花もはやちりゆくまゝに春の日の くれやらぬそらそなかめ性ぬる

述懐

なへて世のうきにつけてもかすならぬ 身にはかすそふ涙なりけり

暮春鶯」二六

春はゝやくれてこそゆけたのにとに なれもやかへるうくひすのこゑ

祝言

おさめしる君かこゝろをたねとして よろつたみのやすく住らむ

旧上らふ

聞恋

われもまたかせのたよりにしらせはや めにみぬ中におもふ心を

新大す

待恋

いつはりのことの葉ならはいかにせむ くれゆくほともまち侘る身に こうたう

逢恋

あふ夜さへぬるゝたもかとし月の つらさのほどをかこつまくらに ちや

別恋

又いつとちきりもをかてきぬ／＼の なこりをなにゝしのゝめの空 新す

怨恋

うらみわひまたしといひしことの葉は わかいつはりの夕くれのそら 安

寄雨恋

かくとたに人はしらしなゆふくれの 雨はさなからそてのなみたを 上らふ

寄山恋

おもひいるみちなまよひそしのふやま しのふはあさき心ならぬに 邦一

寄草恋

とはゝやな軒はにしけるわすれくさ こはしのふとも人のしらしを 新内「二七

寄虫恋

いつまでかとはれぬひとをかこちても かひなきむしの音のみなかまし めゝす

寄席恋

いく夜はやとふのすかこもみふにのみ ねてしも人をまちあかしけむ

暁寝覚

をのつからさめぬるゆめのあかつきを しらせかほなるとりのこゑかな

松嵐

〔貼紙〕すみよしの松のあらしのこゑまでも のとけき御代をさそしらすらん 上らふ

里煙

〔貼紙〕かくれ家とおもひなしてはすむひとの 里のしるへやけふりならまし 新大す

田家

行かよふ人たにもなきをやまたの いほのほそ道あるとしもなし 権す

名所野

けふもまたはやくれかゝるたひころも やともさためぬむさしのゝ原 本古

行路市

なにことをうるともなしにたひ人の ゆくてのいちにたちそましはる こうたう

羈中衣

けふいくか日をかさねきてたひころも」二八 みやこをよそにへたてはてつゝ 新す

旅宿雨

さらてたにつらきたひねの夜もすから あはれをそふる雨のをとかな ち

海眺望

ゆふしほのあとしつかなる浪の上に 又こきいつる舟そたゆたふ 勝一

述懐

いまさらになからふる身をなけかしよ うきにもれぬめくみある世は 大す

文明十八年三月廿九日環らぶ御方と御出題

〔半葉白紙〕二一九

【略解題】

本書の書誌・概要に関しては、既に、『国立歴史民俗博物館資料目録「8-1」高松宮家伝来禁裏本目録「分類目録編」(二〇〇九・三)に、以下のやうな記載がある。

内裏女中月次統歌 自文明十六年至十八年。江戸中期写、外題盡元

天皇宸筆。一冊 〇三四六（ふ函九七）

「装訂」袋綴。「法量」二八・〇×二〇・三。「表紙」藍色水玉文（原）。

「外題」内裏女中月次続哥文明（原・左・簽・書）。「内題」内裏女中月次続哥。「本文」半丁一三行。詞書二字下げ。「丁数」全三二丁。「備考」

八度の歌会を収録。（一）文明十六年三月廿八日上らふ御とう／ちよく題（二）

文明十六年四月卅日二宮御とう／親王御方出題（三）文明十七年四月九日宮

の御方御出題（四）文明十七年五月廿一日旧上らふとう（五）文明十七年六月十九日上らふ御とう／この御所さま出たい（六）文明十七年七月廿一日こ

うたうとう／ちよく題（七）文明十七年八月廿九日あこまるとの御とう／親王

御方御出題（八）文明十八年三月廿九日親王御方／御出題／上らふ御とう

（前掲書・一三〇頁下段）

若干追補すると、墨付は釈文に示した通り二九丁。『目録』は（七）につき、末尾を「あこまるとの御とう」とするが、「安せん寺との御とう」とすべきか。なほ、前表紙見返し右上に墨書の小紙片「ほ」を貼付し、薄朱かと思はれる旧蔵書票「七／二二五／二二」を貼付する。これらの背景については、**3**略解題を参照されたい。

掲出される八度の歌会は、『公宴続歌』に見えず、現時点では未刊と思はれる。井上宗雄『中世歌壇史の研究 室町前期（改訂新版）』（風間書房、一九八四・六）所掲「室町前期歌書伝本書目稿」にも記載がない。また、本書は、「日本古典籍総合目録データベース」によると、高松宮本が知られるのみ。孤本か。

出詠歌人の大半が女房であることが、本書最大の特徴である。室町後期、『公宴続歌』他の歌会資料を検するに、女房歌人の名は散見されるものの、

かかる女房歌会は極めて珍しい。出詠女房歌人の考証は後考に俟つ他ないが、一点、従来の研究史の誤りを指摘しておく。前引『中世歌壇史の研究』で、「安禅寺宮（後花園院皇女か）」とする（六一三頁「人名索引」）が、『実隆公記』文明九年正月三十日条に「今日安禅寺姫宮今上女三宮御母東御方」と見え、時代的に見て後土御門天皇第三皇女を擬するのが正しからう。

なほ、龍頭に貼られる小紙片は、霊元院とその近臣が『新類題和歌集』編纂に際して付したものだと思はれる（酒井茂幸『禁裏本歌書の蔵書史的研究』〔思文閣出版、二〇〇九・一〕二五二頁）。

（武井和人）

2点取和歌

〔国立歴史民俗博物館蔵高松宮本（H一六〇〇一三二二）〕

「点取和歌 永正元年／歌集 雅俊 実隆 批点／御会和歌 永正元年四ヶ度」（後補題簽）

霞隔山

昨日みし雪の面影先きえて たてるやかすみ山のはもなし 御製

雪中鶯

鳴こゑそ春にまきれぬうくひすの 木つつふ枝は雪におほえと 邦高

月前梅

あくかるゝころのひまをもとめてや 月みるそてに匂ふむめか香 永宣

求若菜

見てのみやけふは帰らん雪のしたに それとはかりの野へのわかなは 俊量

※「雪中鶯」と「月前梅」の間に移動すべき由の記号あり。

柳靡風

ほのかなるけふりはかりのいろみえて 外にかせなきあをやきの陰

濟繼

夜帰雁

おりしもあれ夜の雲なき月にしも ゆくとなみえそはるのかりかね おりしも月にしもむつかしくや候へ云々

御製

牧春駒

まこもくさをかものやうちわたす みつ野にいはいふ春のあらこま

邦高

古寺花

春としもわかぬたからの樹なる 花になしてやみねのふるてら

俊量

閑屋花

ゆく人のなこりもさそなあふさかの 閑ふきこゆるはなのはるかせ

永宣

路雲雀

あさふむや春野のすゑになくひはり ひと夜のどこをいまやたつらん

濟繼

躑躅紅

下つゝしかすみひかり明はてゝ 花の色にもこかくれやなき

御製

暮春雨

ひきとめぬはるをおもひのなみたとや 雨もかすみのそてしほるらん

邦高「一

待郭公

ほとゝきすまつとはすれと心さし ふかきたれをかとはむとすらん

俊量

採早苗

笠のはもはやひとかたにならふなり 田子やさなへをとりつくすらん

永宣

池菖蒲

池水のふかきねさしのためしにも 底の千尋を引くあやめかな

濟繼

杜夏草

くくさはもりのしづくもかはかねと 露をはつゆと秋やまつらん

御製

沢辺螢

芹つみしむかしの沢にとふほたる おもひはかよふゆくゑとやみん

邦高

墻夕顔

しつかすむかきほにさける夕かほの 花といふ名のおしくもある哉

俊量

晩夏蟬

秋ちかきこすゑの色もなくせみの こゑのしくれやまつしらすらん

永宣

初秋衣

今よりやひとへになれんから衣 はる／＼まちし秋のはつかせ

濟繼

七夕露

契りまつたなはたつめのよひのまに 置らん露も秋かせのそら

御製

草花盛

うつろふを花におもへは秋萩の 下葉にいそくつゆもめかれす

邦高

山初雁

よこ雲の残るよそめの明ほのや 峯こすかりのひとつらのかけ

俊量

田家鹿

をしねもる山田の庵のあきかせは いくたひきくもさをしかのこゑ

永宣「二

禁中月

雲の上に雲もをよはてみるかけや 世にくまなき秋の夜の月

濟繼

海辺月

海のうへもかきりやみえんめのまへに 千さとおほゆる浪の月かけ

御製

橋上月

はし姫やまつよをうちの河かせも 身にさむしろの月にあかして 邦高

霧中嶋 夕きりにこもれる秋のあはれさの 数をそゝふるしきのはしかき 俊量

搗寒衣 秋さむきかけを霜よにまかへてや 月にはいとゝころもうつらん 永宣

柚紅葉 さま人の斧のあまりやわつかなる 梢のいろにのこるもみち葉 濟繼

暮秋霜 なこりありとおき出^むてみるあともなし あしたの露に秋はゆけ^くとも 御製

朝落葉 こすゑにてみしにもあらずあさなゝ ちるは色なき庭のもみち葉 邦高

野寒草 冬かれのをのゝくくさもかけろふの あるかなきかとみるはかりなる 俊量

冬田氷 朽のこる小田のいなくき霜とけて こほりにかゝるつゆのさむけさ 永宣

湯千鳥 遠干かたいまやみちくるしほかせに 声はくもらてゆく千とりかな 濟繼

江水鳥 氷る夜はかはるせいかにをしりの えにしもあらはとたのむよるへも 御製「三

樵路雪 冬こもるほどやくるしきやま人の たきゝの道をゆきにわすれて 邦高

冬雁狩 今朝よりのおもかけにのみたつ鳥の ゆくゑはしらすくるゝみかりは 濟繼

不逢恋

うらみてもつらしとまてはしらねはや いとふをしめてなをしたふらん 永宣

忍待恋 思ひこし人めもたえてふくる夜に なをつれなさのなにゝまきれん 濟繼

初逢恋 とし月のなみたにかはることの葉を いひなれぬ人にもらしかねつゝ 御製

惜別恋 いましはし明すはありともむつことの おもふにつきん逢夜ならしを 邦高

返書恋 心まつよしとけすともむすひつる そのまゝふみをなとかへすらん 俊量

絶久恋 たえはてゝ年ふる中にわすれぬも いかにわりなきちきりとしらむ 永宣

水郷葦 (貼紙)穂にいつるあしへの月のなにはかた 明るよしらぬ秋のうらかせ 濟繼

河辺鳥 うち河や洲さきを遠みあるとりの よりはにゝたるはしをみえつゝ 御製

山家夢 (貼紙)のかれきてすむ身はしらぬ山にても うき世にかよふ夢やのこさむ 邦高

旅行友 (貼紙)ゆけはゆきやすらへは又やすらへる 心のみちもおなしともとち 俊量「四

独述懐 (貼紙)身のたくひまれにもあらはなくさめて うきをならひの世とやおもはん 濟繼

暁神祇

(貼紙) ますかゝみなをそのかみのさかき葉に かけしひかりやあり明のつき
永正元年八月十七日公家後大新言点 永宣

(六行分空白)

(半葉白紙) 一五

初春鶯

なくこゑはかはらすなからあらたまの はるをむかふるやとのうくひす 邦高

霞中滝

亀の尾の滝のしらなみいくとせの 春のかすみをとめておつらん 御製

梅移袖

やとちかき梅のしたかせかよひきて まつ人のかにそてそにほへる 季経

田辺柳

青柳の色を門田のうへにみて 賤士やさなへのころをまつらん 俊量

春月

おほなるそらよいつくをかきりにて 春ともわかぬ月はすむらん 元長

帰雁

わかれてはのちしのふへきおもかけも かすみにきゆるかりのいつら 重治

春曙雲

山のはゝはなとかすみにあけほのゝ 雲のゆくゑそさまゝになる 和長

雨中花

なかもやるとを山さくら色くれて 軒はにかすむ春雨のそら 永宣

糸桜

春かせにかつみたれゆくいとさくら 又くりかへす木すゑともかな 賢房

夕款冬

おる袖にかけてもおしきゆふ露の ひとりこほるゝ山ふきのはな 済継

卯花盛

外にみぬ木陰はかりのゆふ月夜 おほつかなしやさける卯花 邦高

初郭公

ほどゝきす都にきかはことしもや 初音をこゑのかきりならまし 御製 六

早苗

これも又あかすよしつかうたふ歌の ふし立さなへうへわたす比 季経

袖菖蒲

わか袖にえにしあるこそかゝるらめ ひく手あまたのけふのあやめは 俊量

夏夜短

夕すゝみ立やすらひしまきの戸を さすほともなくあくるそらかな 元長

湖蛭

浪のうへの星の光もにほの海に 猶かすそひてとふほたるかな 重治

暁夏

夏はなと人のおしまぬ月日にて みそきにいそくそてのあきかせ 和長

新秋暁新古今集敷たへの枕のうへに過ぬなり露をたつめる秋のはつ風下句いたくかはらす候敷

をきそふる露をねさめのしるへとて 袖をたつめる秋のはつかせ 永宣

原萩

さらに又いかなるたねそまはきはら 花にふるえのいろはのこらて 賢房

袖鹿

ひくといふ心もしらぬつまにこそ よもきかそまのしかはななくらめ 済継

蘆辺雁

あしそよく浜へしこらすはるゝと むれゐる雁のかすもわかれす 邦高

秋夕

しはしたに思ひをくへき跡もなし たゝ雲かせの秋のゆふくれ

御製

閑見月

とてもはや老となる身はいく夜半も 心しつかに月やめてまし

此第三句いく夜にて事は足候歟文字あまりてきこへ候歟如何

季経

惜月

ゆく月の入さの山のはてまでも 心をそへてみるよしもかな

俊量「七

暁礎

ふけぬとしてしつかきぬたをいそくにや うちおとろきてとりはなくらん

元長

秋霧

行なれし人をするへの道もなし 霧たちまよふ峯のかけはし

重治

紅葉遍

した染にしられしほともしられけり 霜にはうすき紅葉ゝもなし

和長

開時雨

人すまぬふはのせきやのあれしより しくれはいとゝもる板間かな

永宣

樵路霜

あれにし後はたゝ秋の風後京極撰政秀歌候第一第二句不相替之条不可然候
つゆしものおくやまふかく分きつる ましはやたくもうちしめるらん

賢房

千鳥

しられしな夢よりのちのさ夜千とり よそにかたらふ契ありとも

濟継

寒月

すさましと見たしたにあるに霜雪の ひかりもそひてすめる月かな

邦高

柏藪

もとかしわもとのしつくや玉あられ ふるからをのゝ露にきゆらん

御製

古寺雪

さのゝわたりの雪のたくれの後斟酌あるへきやうに申候歟但歌によるへき

鐘の音はうつむともなしはつせ山 ひはらもみえぬ雪のゆふくれ

事に候間捨可有作意候心候哉

季経

爐火

おいにけりあたりもさらてうつみ火の もとのこゝろのかはるはかりに

俊量

伝聞恋

偽のある世にきゝし人のうへの はかなやいかて恋しかるらん

元長

見増恋

わたつ海のみるめかるにもいとゝなを 身はしつむへきえにしつらしも

重治「八

逢恋

あらさらむこの世の後もあふことを 今にならひてちきりそへつゝ

和長

急別恋

かきりある夜のまもまたぬわかれちは いかにつれなき心なるらむ

永宣

誓恋

あたにやはちかふこと葉をおもはまし われはまことを神にまかせて

賢房

馴恋

かはかりはうきにもなれて過ぬるを なをいかさまにいひかはなれん

濟継

偽恋

あたにのみさもいひをけることのはよ いかにとたゝす人もこそあれ

邦高

黙恋

ましてしはし人にうきみをするはかり 世はそむくへき道ちよあやなからむ

御製

歎名恋

涙のみかゝるこひちのぬれ衣を もゆるおもひにいつかほさまし

季経

欲絶恋

くれ竹のいかなるふしをもとめてか よかれもしけき中となすらん

俊量

故山猿

(貼紙) 山とよむ滝つしらはは浪に 梢のさるのこゑそきえゆく

元長

潤戸恋

(貼紙) すむ人のありともたれかしらくもの 軒はをうつむたにのした庵

重治

野風

花も葉ものころはみえず乱あひて 野分のとそ又千くさなる

和長

田家

いつよりかかきねの竹の生そひて 小田のかりほも里となりけん

永宣 九

橋行客

(貼紙) おもふとちかたりゆくにやわするらん いてしといひしたにのかけはし

賢房

砌下松

契をくよはひのまゝのかけならば 松よりくちぬ軒端をやみむ

済継

永正元年八月廿六日 侍従大納言点

(六行分空白)

(半葉白紙) 一一〇

海早春

いせの海のもしほの煙たつそらも はるの色にやかすみそむらん

道永

霞隔遠樹

きえあへぬ雪はきのふのみねの松 けさはかすみに又むもれぬる

邦高

田若菜

小山田や月日を春にかへすこそ けふのわかなをはしめなりけれ

待鶯

ときわかぬ園生の春をしるはかり たつねきかせよ竹のうくひす

季種

月前梅

月かけにいたまのかすはあらはれて ねやにみちたる梅のしたかせ

元長

深夜帰雁

ふかき夜のなみたまよほす手枕は 月もわかれてかへる雁金

永宣

堤柳

水けふる河辺のつゝみあさなゝ おなし色そふ青柳のかけ

済継

※「月前梅」と「深夜帰雁」の間に移動すべき由の記号あり。

春曙

水無瀬山むかしにかへるはるの色や のとにかかすむ春のあけほの

重治

静見花

みるかうちは花より外におもふこと たえてこゝろそ春にのとけき

俊量

花下送目

けふもなをかへすは花のうきものと われしりかほのはるのこのもと

実隆

朝暈

むらさきのうつろふ色はあさつゆを 袖にふかめてつむすみれかな

道永

藤埋松

春といへはさく藤なみのむもれ木と 松をみせたる庭のいけ水

邦高 一一

新樹

をくれてもさくらん花の一木もや 青葉の山のかけのした草

郭公未遍

人ことにまつ比たにもほとゝきす さとわきてなく一こゑはうし

季種

早苗

ひきのこす早苗のあとにうへつきて むらゝしける色はみえけり

元長

五月雨

時のまの日かけうつろふ草の上の 露めつらしき五月雨のそら

濟繼

鶉河篝

さす舟もみえぬう河の夕やみは 浪にそもゆるかゝり火のかけ

永宣

瞿麦

いつの世から紅の色をしも うつしをきけるやまとなてしこ

重治

夏月似秋

ひかりをは秋のころにまかへても まきれぬころそみしかよの月

俊量

閑居秋来

さひしさの身はならはしのあさちふに なにをかつくる秋のはつかせ

実隆

織女契

天の川ふかきちきりも七夕の あふせやとをきわたりなるらん

道永

荻催涙

聞たひにあはれすくさぬそてのつゆ おきふくかせや身をくたくらむ

邦高

薄為墻

花すゝきなひくまかききやまかせに たかそてみせて夜るもこゆらん

季種

露脆

よるは猶月をやとしていとふそよ 庭の真萩の露をふくかせ

季種 一一二

虫怨

夕霜のかけとたのためとまくす葉の うらふく風を虫やうらみむ

元長

野外鹿

妻こめぬをのか秋にも春日野の はるのおもひにしかやなくらん

濟繼

秋夕傷心

菊をおり紅葉をかさすなくさめも おもふにあかぬ秋のゆふくれ

永宣

月出山

待いてゝおもひやるにもあつまちの 空やいくへの山のはの月

重治

対月憶昔

なかめつゝあかぬひかりにおもふかな しらぬむかしの月もかくやと

俊量

擣衣不眠

さよ衣うちあかしてはたゆむまの 夢はかりなる夢をたにみし

実隆

紅葉

かつちるもあはれとそみる秋をへて 老木やもろき露のもみち葉

道永

初冬

くれし秋の露ほしあへぬそての上に 又しくれつゝ冬はきにけり

邦高

時雨易過

さそひゆく風も吹あへすむら時雨 雲をのこしてもる日かけかな

残菊

あれわたる籬のきくは匂ひさへ 霜にへたてゝのこるともなし

季種

水初結

うす水けさそむすひしいもせ山 をひにめくれる谷のした水

元長

千鳥

君か代をいまいく千世とはま千鳥 浜のまさこにかそへをくらん

濟繼 一一三

網代寒

浪こゆるあしろのところに影さえて 月そたもとのつらゝともなる

永宣

檜原雪

かさしにもおらまし物をはつせ山 ひはらの雪は道たえにけり

重治

不叶心恋

なからへて物はおもはしいのちたに 我にまかするならひなりせば

俊量

蔵書恋

あかなくに又みんと思ふ玉つさの ちらさしとするにをき所なき

実隆

変約恋

たのみこし人のこゝろもいろかはる ことの葉くさにもや置らん

道永

並枕恋

しるや人おもひおもはずかりそめに かはすまくらもよゝの契を

邦高

後朝恨恋

残る夜をわかひとりにねにあかしても とはぬにまさる思ひやはなき

季種

久恋

なをさりのなさけもたえて年月を ふりゆく身こそはてはつらけれ

元長

古寺鐘

ふる寺の軒はもみえぬ一むらの 松にこゑする入あひのかね

元長

篠風

〔貼紙〕吹しほるこの朝かせのをさゝはら たか分そめしつゆこほるらん

濟継

旅人休橋

〔貼紙〕山路をもやとのあるしにことゝひて 駒うちわたす里の河はし

永宣

市商客

〔貼紙〕うらやましその家々にうる道の かひある名にもたつの市人

重治

短夢

〔貼紙〕うつゝをもあたる物とおもふにそ ほとなき夢はおとろきもせぬ

重治

寄世祝

すなほなる道をそあふく千はやふる 神よのまゝのはすみしる世に

実隆

永正元年十月廿一日 点者 政為卿

〔半葉白紙〕一五

立春

〔半〕神代をいまにうつして出る日の もとの光にはるやたつらん

永宣

早春鶯

〔半〕花のえの色にもねにもいそけとや うくひすさそふ春のきぬらん

賢房

山霞

春の色やつゝむにあまる山のはの かすみのそては立かさねても

為孝

海辺霞

漕出し舟路のすゑのいかならん かすみはてたるおきの遠島

尚頭

余寒雪

〔半〕かへりつるとしはいづくにやすらひて つもらぬ雪のそらにふるらん

元長

子日松

〔半〕さゝれ石のいはほの松の子日にや かねてもみゆる千世を契らん

元長

沢若菜

雪こほりとけゆくあとにつむせりの ねもしろたへの春の沢みつ

邦高

野早蕨

〔半〕春さむき深山は雪の下わらひ もえ出る野へにおりをしれとや

俊量

窓梅

窓ちかくさく梅かゝをことの葉に うつしとゝむるはるかせもかな

重治

路梅

〔半〕ゆく末も猶さたかなるしるへして 梅かゝとをきはるのやまかけ

濟継

河辺柳

河かせや霞のうちにたゆむらん 又色きゆる青柳のかけ

永宣

夕春雨

ふるとしもみせぬ夕のはるさめは かすみのそてにつゝむ涙か

賢房「一六

春月幽

月も又めてこしはるのかけならば あかぬ心にかすむとやみん

為孝

帰雁遥

なくこゑはしはし残ておもかけは 雲にきえゆく天つかりかね

尚頭

栽花

うへをくはわかみひとつのためにしも かきらぬ世のはなの色かな

元長

折花

あかす思ふ心をみせておるそてに つゆけきはないたれうらむらん

邦一

落花

したへともあひもおもはて散花を いくたひはるにかこちきぬらん

邦一

籬款冬

いはすともまかきの中の色ほかに あらはれそめむ山ふきのほな

俊量

池藤

たちなれて上毛にまかふ藤なみに あかすともなふ池のをしとり

重治

三月尽

いかににみむ今はのはるよけふをきて 思ひしたにもあかぬなこりを

済継

墻卯花

くれ竹のすゑひきかこふまかきをや 雪をれみせてさける卯花

賢房

簷新樹

はなにみし軒はの木とのわかみとり あらぬ色にもこのころおもかけ

為孝

待郭公

よな／＼のつらさに今はほとゝきす 五月のそらの日かすをそまつ

尚頭

郭公稀

桐にすむ名におふ鳥のなになれや 世にいてかての山ほとゝきす

元長「一七

江五月雨

五月雨は玉江のまこもかりそめの 浪間もあらは雲間をもみん

夏夜月

夏の夜ははかなく明てうたゝねの 夢にまきるゝ月のころかな

邦一

叢間螢

あたならぬ草葉の露よおもひにも けたぬほたるの散にまきれて

俊量

村夕立

みわの山松原くもれる程もなく 遠ちの村に過ゆふたち

重治

杜蟬

すゝしさは露もしられて日くらしの こゑさへあかぬもりの下道

済継

夕納涼

なくせみのこゑのゆくゑもしら露の 光くれぬる山のすゝしさ

永宣

初秋風

うきは世にならひとばかりなくさめて また身にわかぬ秋のはつかせ

為孝

七夕契

かはらしの契そふかきあまの河 あふせはとしに一夜なれとも

尚頭

庭萩

あかつきの音たにたえよ夕かせに 下葉おれふす庭のおきはら

元長

野萩

今よりのやまの錦もあひ思 色にやふかき野への萩はら

原薄

花すゝき秋かせそよくおもかけや つゆもかはらぬまのゝかやはら

浅茅露

はらふ人なきにつけつゝをのか物と 露やゝとれる浅茅の庭

朝野分

朝かほのつゆのやとりのふることを あらしはてゝも野分立空

秋夕

ゆふへをはわすれんと思ふ秋の色を 入あひのかねの誰に告らん

虫声滋

思ひわくたか心にかえらふらむ きゝすてかたきむしのこゑ

雲外雁

一行はまつなきおちて天津かり 雲のいつくの友したふらん

遠聞鹿

ほのかなる声もをしかのゆくすゑを 峯こそ月や猶送るらん

待月

いかなればよな〜いつる月かけを あかぬ心になをいそくらん

見月

よしやみのおろか成とも月をみる なさけはかりは誰にをくれん

惜月

秋風のそらゆく雲にうつりきて いくたひ月のかけしたふらん

曙山霧

あけほのやたつ河かせの霧の上に うかへる山そみえてなかるゝ

里擣衣

秋かせのたよりにてきてきこゆるは いくさと〜に衣うつらむ

菊久盛

心ある花とやはみぬ露しにも 名残をとむる秋のしらきく

紅葉残

露しものふかき心のおくはなを 紅葉にのこる木のはつしほ

紅葉脆

かつ散もころの色はふかゝれや つゐにあらしの峯のみち葉

暮秋

暮るをもしゐてそしたふうき秋と いひしはたへぬ心なりけり

寢覚時雨

われのみのねさめはかりか晴くもり 千さとをかけてしくれゆく空

寒草霜

もえそめし春もひとつの野への草 かれての霜のわく色もなし

夕霰

あさ霜のしみつくさゝ葉そよ更に 夕かせたちてちるあられかな

松雪

おれかへるほとは青葉の松かえや つもりつもらぬ雪をみすらん

竹雪

枝ことなたはゝにみえてくれ竹の 直きこゝろは雪もうつまし

河上氷

たえ〜の石間にむせふ音羽河 せき入しまやまつ氷るらん

邦一

俊量

重治

濟継 一九

永宣

賢房

尚頭

元長

邦一

俊量

重治

冬暁月

霜（寒）にきえ氷にくたくよな／＼の 光もつきぬあり明のそら

済継

湊千鳥

舟とむる湊入江のとも千とり たか手まくらの夢さそふらん

永宣

夜埋火

いくたひかかきおこすらんうつみ火の あるとしもなきかけを契て

賢房

歳暮

いそくへき道やかはらぬ人なみに あくるをまたぬとしには有とも

為孝「二〇

寄月恋

さらてたにさすらひ出ん月の夜に とはぬは人のおもひくまなき

元長

と風（寒）

身をしほる野分はそでのなになれや 草木にたへぬ露をのこして

元長

と雲（寒）

なひくへきならひはしらてへたて行 人の心やみねのしらくも

邦一

と雨（寒）

このくれのさはりはせしとまちわふる 涙のほかはふる雨もなし

俊量

と暁（寒）

鐘のこ多鳥かねなくはあか月の うきわかれをまかねてしらしな

尚頭

と夕（寒）

まち（思）こよいつをたのめし夕そと こゝろにとへはなみたおちつゝ

重治

と夜（思）

夢はなをまたすしもあらず恨ては よゝしとつけぬよをかさねつゝ

済継

と山（思）

思ひ入こゝろにさはれつくはやま まよひはつへき恋ちなりせは

永宣

と野（思）

いくよまでそよとはかりの音信に こゝろさはかすぬなのさゝはら

賢房

と河（思）

たえはつるうきせをみればなみた河 わかみなかみの猶やまさらん

為孝

と浦（思）

契てもこぬみのうらのあた浪を いくたひそてにかけてわふらん

元長

と木（思）

ことにはやいつみの根本ひくかたに 行ならひそとかこちてもみん

尚頭「二一

と草（思）

とはすはと思ひし物を草のはら かれてもかれぬ陰の露けさ

済継

と鳥（思）

きかすやはさなから鳥の跡つけて 書やるふしになくねそふとも

元長

と虫（思）

夜寒をや鳴てうらむるきり／＼す われはいもおもふ秋のねさめに

邦一

と衣（思）

たれゆへとしられすはよし恋衣 忍ふもちすりみたれそふとも

俊量

と枕（思）

まちみるもけにはかなしやことのはを かはしもはてぬゆめの手枕

重治

と弓（思）

我に引こゝろとはなし手になれて まゆみつき弓年はふれとも

永宣

と鐘（思）

さらぬたにあはれこもれる鐘の音の などわかれ路のものとなるらん

賢房

と船と

へたてゆく心のみるもこく舟の あとなき波そそてにくたくる 為孝

暁山

めぐりゆくほしの光に山みえて あかつきやみのすめる夜の空

夕野

冬かれの野へはおくなき夕霜に 松のみみえてたてる寒けさ 邦一

夜雨

草の庵のしつかなるへき夜の雨も さひしさ告る音はありけり 元長

窓燈

さひしくもあまそゝきする窓の中に かけうちしめる夜半のともし火 俊量「二二

庭苔

岩木にも苔むす色に山ふかき おもかけうつす庭ふりにけり 重治

江葦

なにはかたかるゝあしへもくもりなき 玉江の水のかけのさひしさ 濟繼

浦松

たつの鳴いり日のまつはさたかにて 夕しほむかふ浦かせそふく 永宣

山家雲

一むらの雲につゝくもやまさとの ほそきけふりは色もまかはす 賢房

山家風

かせの音もなれてはあかぬ山さとに 軒はのまつの契りをそしる 為孝

田家鳥

もる人もはやすみすてし庵なれや 門田をちかみつるそむれ居 尚頭

閑居

所から岩屋の軒のこけの上に 松の落葉も聞はかりなる 元長

故郷草

すみすてし里は野となる庭の面に いくたひ草の生かはるらん 邦一

旅行

うつりゆく野山にみえてかなしきは たかおもかけのふるさとのそら

旅宿

かりねする岩木のかけは心あれや やとかす人のなきにくらへて 俊量

旅泊

波かせのひゝきのあなたはなたらかに ぬる夜もしらぬ舟の中かな 重治

述懐

わきてしもおもふへきにはあらぬ身の たくひにこえぬうき世ともかな 濟繼「二二三

往事夢

あはれしる此身をなにゝさためてか むかしを夢におもひなすらん 永宣

神祇

人やそのねかひはかはるもろくの 神にちかひのおなし心を 賢房

釈教

むなしきをまことにたのむりならば 尋ぬ道にまよひやはせむ 為孝

祝言

亀の上の山とさくよりもゝしきは まつ吹かせも万代のこゑ 尚頭

「僻案愚点二十三首

雅俊上(朱)

永正元年十一月十八日

僻案愚点卅二首

雅俊（朱）

愚詠	七首	御製	四首
式部卿宮	八首	式部卿宮	一首
按察	一首	按察	四首
甘露寺中納言四首		甘露寺中納言	五首
源中納言	二首	右兵衛督	二首
右兵衛督	一首	濟繼朝臣	四首
賢房朝臣	一首	為孝朝臣	二首
濟繼朝臣	六首	尚頭	一首
為孝朝臣	二首	清書隆康料紙小高禮紙	

清書勅筆料紙半切」二四

【略解題】

本資料は高松宮本が孤本である。翻刻は皆無で宮内庁書陵部蔵『公宴続歌』にも収録されていない。以下の四種の点取和歌を収める。

- ① 永正元年八月十七日宮中五十首続歌 三条西実隆点
- ② 同二十六月宮中五十首続歌 実隆点
- ③ 同十月二十一日宮中五十首続歌 下冷泉政為点
- ④ 同十一月十八日宮中百首続歌 飛鳥井雅俊・実隆点

次に書誌を掲げる。

縦二八・〇糎×二〇・三糎。袋綴一冊本。表紙は藍色の打曇、練色の水玉流し。半丁一二行。和歌一首二行書。全二六丁。外題・内題なし。尾題

I 「永正元年八月十七日〈公宴／侍従大納言点〉」、II 「永正元年八月廿六日 〈侍従大納言点〉」、III 「永正元年十月廿一日 〈点者 政為卿〉」、IV 「僻案愚点二十三首／雅俊上／永正元年十一月十八日／僻案愚点卅二首／実隆上」。合点あり。IVのみ朱が加わる。一部の歌頭に菱形藍色の小紙片を貼り付ける。表紙に後補の「点取和歌 永正元年／歌集 雅俊 実隆 批点／御会和歌 永正元年四ヶ度」の紙片を貼付ける。

歌題は原態では歌頭にあるが、釈文では行間に移動させた。そして、底本の行間に存する小字の評語は、一首二行書を一行書に翻刻したため、適宜位置を移した。また、④永正元年十一月十八日宮中百首続歌のみ朱の合点を有するため、朱と墨の区別を注記した。続歌のため作者名は実名表記であり、一人あたりの歌数も一定ではない。なお、東山御文庫本『仙洞新写歌書目録御土代』、高松宮本『歌書目録』にそれぞれ「点取和哥 永正元／四ヶ度」とあり、原題が「点取和哥 永正元／四ヶ度」であったこと、また、享保四年頃までに靈元院の仙洞御所で書写されたことが知られる。（酒井茂幸）

③ 禁裏三席御会和歌

〔国立歴史民俗博物館蔵高松宮本（H16001319）〕

〔内裏御会 〈晴儀／大永五年三月廿四日〉（外題〔題簽〕）
禁裏三席御会一座

詠花色春久

俊哥

としをへて色香も花にますかゝみ かけていく世の春をちきらむ

二品知仁親王

同加季同
さく花にのとななる世をうつしてや はるのこゝろも色にいつらむ

近衛殿
准三宮尚通

花の色もこゝのかさねのなかにては あらしもきかて万代やみん

九条殿
従一位尚経

ふくかせも枝に音せてあめつちの ひらけしまゝの花の春かな

二条殿
関白藤原尹房

きみか見む春をかそへはよろつよを こゝのかさねの花の色かな

後法輪三条殿
従一位藤原実香

やまのおる袖ならぬはるのはな あさ露ながら千代もへぬへし

徳大寺殿
左大臣藤原公胤

はるかせを色香をしるやさく花の のとけきかけに千代もへぬへし

久我殿
内大臣通言

きみもひとにあかてみる世はひさかたの 雲のの花のいろやそふらん

小倉
正二位藤原季種

吹くかせもおさまる枝にさく花の いろにやいつるよろつよの春

甘露寺
民部卿藤原元長

かそへみは松のちとせは十かへりの 春もをよはぬ花の色かな

我きみのひかりくらぬくものうへ はなやちとせの色をそふらむ

広橋
権大納言藤原守光
三条西
太宰権帥藤原公条

こゝのへにあくまで色をみつかきの 世ゝのかさしとにほふはるかな

勸修寺
権大納言藤原尚顕

のとななる御代のひかりのさくはなは ちとせの春の色もかきらし

西園寺
権大納言藤原実宣

よろつよのはるほとゝへは雲のうへの はなや色かにいてゝみすらん

四辻
権中納言藤原公音

雲のうへに色香かさなる八重さくら やちよの春はきみやかそへん

中山
権中納言藤原康親

いろそへむ花にちとせのためしをは 雲あのはるのけふにはしめむ

鷺尾
従二位藤原隆康

のとななるはるをひかりといやとしの はなにくはゝるちよのかけかな

上冷泉
右衛門督藤原為和

こゝの葉のたまのみきりやさく花の ひかりもちよの春をみすらむ

甘露寺御方
権中納言藤原伊長

としゝの春の色香もひさかたの 雲あのとけき花さかりかな

日野

権中納言藤原内光

おりにあへはいろかをそへてさくらはな けふよりちよのかさしとやせん

万里小路

参議右大弁藤原秀房

雲のうへにははらぬ春をちきりをきて はなにもこもる千世の色かな

飛鳥井

左衛門督藤原雅綱

世は春のけふをまちえて雲のうへの はなも千年の色やそふらん

庭田

参議右近衛権中将源重親

きみそみむ花のいろかもひさかたの 空よりにほふひかりのとかに

柳原

藏人頭右大弁藤原資定一四

我きみの春とやはなもいろそふ けふをはしめのちよのかさしに

松木

藏人頭左近衛権中将藤原宗藤

雲のうへはかせのとかにてさくはなの いろかに見するちよのはるかな

勸修寺御方

藏人左少弁藤原尹豊

さらにいまさきそふ花も君か代に あへるをときとにほふひさしさ

広橋御方

藏人権左少弁藤原兼秀

きみかよのちとせの春をためしにて 花やときはの色香ならまし

下冷泉

左近衛権少将藤原為豊

いくとせのいろをかさねてにほふらん けふもゝしきの花のはるかせ

(四行分空白)一五

題 勅題

読師 左大臣

大永五年三月廿四日和歌御会 講師 資宣定

御製 読師 関白と

講師 右衛門督

此外下読師飛鳥井役者也

又御製の発声同人役者也、為後覽注之也

(一行分空白)

右者雅綱卿以自筆書之

(半葉白紙)一六

【略解題】

本資料は、大永五年三月二十四日催行の内裏御会の和歌のみを書写したもので、高松宮本が孤本である。翻刻は皆無で宮内庁書陵部蔵『公宴統歌』にも見えない。以下に書誌を記す。

縦二八・一糎×二〇・三糎。袋綴一冊本。表紙は苗色無地。外題・表紙の左肩に題簽「内裏御会」〈晴儀／大永五年三月廿四日〉(靈元天皇宸筆)。内題(端作り題)「禁裏三席御会一座」／詠花色春久／倭哥。半丁九行。和歌一首二行書。全八丁。本奥書「右者雅綱卿以自筆書之」。見返しに墨書の小紙片「へ」を貼付け、薄朱の旧蔵書票「書架番号／七／部門／二二六／図書番号／五」を貼付ける。江戸中期写。

見返しの小紙片は、慶応元年の旧有栖川宮家における蔵書整理を反映したもので、宮内庁書陵部蔵『西面御文庫宸翰古筆並和漢書籍総目録』(有栖

一五〇八〇）〔吉岡眞之・小川剛生編『禁裏本と古典学』二〇〇九、塙書房〕に小川剛生による翻刻がある〕の「へ印」に「内裏御会 一々」と見える。薄朱の旧蔵書票は、昭和十三年の高松宮家における整理によるものである。

なお、享保九年頃までの靈元院仙洞の蔵書を示す東山御文庫本『仙洞新写歌書目録御土代』に本資料の外題が記されており、靈元院の晩年に仙洞御所で書写されたことが知られる。

大永五年三月二十四日の晴御会は、本書内題には「禁裏三席御会一座」と見えるが、実際には和歌と御遊の両席御会であった（『二水記』等）。当初三席御会として準備されていたが、漢詩の講頌の伝承が断絶していたため、十三日に急遽両席御会に変更されたのである（『元長卿記』、坂本麻実子「戦国時代の御遊―後柏原天皇の御会始御遊をめぐって―」、『桐朋学園大学研究紀要』第二三集、一九九八・一〇）参照）。ただ、三月五日に既に勅題が御教書として出詠者に通達されており（『二水記』）、両席に変更されその由が上奏される一三日以後間もなく、飛鳥井雅綱が披見し得た懐紙の清書原本が、本資料の親本であったと思われる。末尾の披講諸役の記載は親本では後補であった可能性がある。

（酒井茂幸）